第21回鳥居伊都賞受賞記念講演　福島令子氏

　福島令子でございます。皆様ありがとうございます。

 思いがけない大きな賞を頂きまして、ちょっと一言ごあいさつをしなくてはいけないと思います。

　子どもに障害を持つということは、とても親にとっては衝撃なことなんですね。福島智は、私の三男の福島智のことになるんですが、１歳のときから目のほうに症状が出まして、思いもかけないことですが、これは原因がわからないというので、もう毎日、眼科に通いました。

 やがて、２歳になりましたら、とうとう入退院を繰り返すことになったんです。それで、そういうふうにして努力しましたのに、薬石効なく、３歳で右目を、９歳で左目をやられたんですね。それで全盲になりました。

　そしたら、眼科の診てくださっている偉い先生は、盲学校という言葉は一言も出されませんでした。盲学校の主治医やったらしいですのにね。で、私から言いました。「先生、智を春から盲学校にやらしたいと思いますが」って言いましたら、「あっそれはよろしいね」と言って、「それじゃまあ、点字をしっかりしてくださいね」と言われました。「盲学校は、いろいろな子があるから、いじめとかそういうことがあるけど、まあ福島君なら大丈夫でしょう」って。入院中でもやんちゃ坊主でしたからね。だから、それは知れ渡ってたんですけれども、そう言って励ましてくださいました。

　それで、小学部４年生から、兵庫県の盲学校が近くにありましたので、通い始めました。

　ある日、ふと思ったんです。福島智の見えなくなったというすごい衝撃と、本人の心の中の悲しみ、苦しみ、それを母である私が理解してるんだろうかと、私自身に問いかけました。そして、ああそうや。ちょっと目をつぶって少し歩いてみようかと思って、盲学校へ連れていって帰るときに、通学路があるんですね、安全な通学路が。それは、歩道みたいなのが20メートルぐらい、何も物がありません。そこを、まあ20メートルぐらいやったら、10メートルでも20メートルぐらいでも、まあここは安全やから歩けるやろうと思って、目を閉じて１歩２歩と歩き始めますけど、とっても恐ろしいので、盲学校の塀を触りながら歩きました。

　ところが５歩か６歩目歩いたときに、急にうわあっと大きなダンボールみたいなのが、その道に出てきたような気がして、思わずぱっと目を開けてしまったんです。ああ、私はだめやなあ。いつも智にえらそうなことを言いながら、私はもう５メートルも歩けないんや思って、目の見えない人は大変やなあと思いました。

　それで今度、おうちに帰ってから、きょうのお風呂は目を閉じて入りましょうと決心して、お風呂に入ります。そしてお風呂につかって、それからシャンプーやリンスをします。きょうは絶対目を開けたらいけませんよと、自分で、それは自分に決めといて、そうして今度リンスをするときに、リンスのふたがころころころっと転げていったんです。今みたいにプッシュするんじゃなくて、いちいち、ジュースの瓶のようにふたを取る時代やったんですよね。そのリンスのふたがどっかにころころっと転げちゃったんですよ。

　あらあ、まだいっぱいあるのにもったいない、倒れたら大変やと思って、足で一生懸命お風呂の床を探すんですけれどもありません。手でも一緒に床を探します。すると、だんだんいらいらしてきて、「目を開けたらいけません」という自分で作った約束を忘れて、ぱっと目を開けてしまったんですよ。そしたら、周りがぱあっとひらげて見えるでしょう、明かりが入ってくるし。物の形も見える。色も見える。

　だけど智はもう生涯、この心の広がりというか、明るさというか、それをもう体験できないんやと思ったら、これからの私は、智に何をしてあげたらいいやろうと考えたとき、そうや、智の心を守っていこうと、それ一点に絞ったんですね。まあやんちゃな子でしたけれども、優しいところがある。それから明るい、そういう心を守っていこうと、その一点に絞りました。あとは何も、勉強しなさいとか、あれしなさいとかいう命令はしなかったように思います。もうほとんど忘れてますけど。それだけはしっかり覚えているんですけれども。心を守っていこう、それだけは強く決心しました。

　それから、盲学校へ行き始めたら、近所のおばさん方は、「今まで自転車に乗ったり、何かして元気な坊ちゃんやと思ってたのに、白杖をついてお母さんと毎日盲学校に通ってはるらしい。気の毒になあと思ってたら、毎朝にこにこ笑いながら、何か楽しいお話をしながら通ってはる姿を見て、ほっとしました」と言ってもらいました。

　そのように智は、今までは普通校でも「目に炎症が出てきたから安静をさせてください」と言っては休学をさせられたんですね。だから、１年の間に３分の１も、まともに通えたかどうかというような状態やったんですが。

　それで、あの。すみません、ちょっと、のどが渇いちゃった。

　で、私は、智の心を守っていこうということだけに一生懸命、心を決めたんです。

　そうすると、今までは普通校では行きたいのに休まされてたでしょう。「なんで僕だけみんなと勉強できないんだ」と言って、小学校１年生の子が「お母ちゃん、勉強のためのドリルを買うてきてくれ」と言ってドリルを買いにやらす。そして「目に悪いから勉強はしたらいけません」と言ったら、よけいにする。そういうような子でしたが、盲学校に行くようになってからは、「もう僕は、目の病気のためにお休みしなさいってお医者に言われないから」というので、のびのびと勉強するようになりました。

　そして、今までのを取り返すように、もうほんとに、どう言うのかねえ、ほんとに学校は遊ぶ場所、勉強は家に帰ってからすると決めてるみたいで、学校では一生懸命お友達と一緒に遊んでるから、盲学校のお友達は「福島君は、いつ勉強してるのかなあ」と言われたそうです。

　先日、こんなおもしろいエピソードを聞きました。中学３年生のとき担任してくださってた先生が、テレビの『なんでも鑑定団』とかいうのに、自分の美術品のつぼを出されたそうです。そのときに、局の人が聞きました。「先生、学校の先生をなさってたそうですが、何かおもしろいエピソードはありませんか」って言われたら、「いやあ、１人だけ天才がおりましてねえ。そいつはねえ、英語の時間に数学をしたり、理科の時間に英語をしたりなんかしてるから、ちょっと叱ったことがあるんですが、驚いたことに、テストはいつも100点なんです。そいつは今ねえ、東大で教授をしておりますわ」とか言って、何か得意満面に話されたというのを、また録画した人がいて、それを見せてくださいました。へええ、私、そんなん初めて聞きましたんで、智のことを天才やなんて思われとったんかと思ってね。

　皆さん、「福島智さんは頭がいい」と言われますけど、すごい努力家であるということは、私は認めておりました。化学式でも何でも、もう覚えるまで口の中でぐちゃぐちゃ何べんも何べんも言って、家の中をぐるぐる、ぐるぐる回って、夏休みでも。それを自分が覚え込むまで、口でむにゃむにゃ言っておりました。

　それから、点字の、何か数学の問題をしてました。「おかしいなあ。この問題は。どうしても解けないんだ」と言ったら、１日中、家の中をうろうろしてて「あっやっとわかったわ」。ＸとＹが１点違うだけでＸとＹが違いますでしょう。「ああ、日点（日本点字図書館？）とあろうものが、点を間違えてる」とか言って、えらい怒ってました。そういうことがありました。

　きょうは、ちょっと指点字のことを話すんでしたよね。ちょっとそれましたけれども。

　高等部からは、先生方のお奨めで筑波大学の附属盲学校に行くことになったんです。そしたら１年生に入ったときに、智から電話がありました。「お母ちゃん、点字をもっとしっかりしてくれないか。今、いろんなものをテープに入れてくれているけれども、ほんとにしっかり勉強しようと思ったら、やはり点字を読んだほうが身に付くんだよ」といって言いました。私、点字って、こちこち手打ちのやつはしてたんですけど、「もう点字は、肩凝るから嫌や」って言いましたら「僕が置いてきた古いライトブレーラーがあるだろう。あれを一生懸命したらねえ、ピアノのように楽しいんだよ」と言ったんですよ。ほんまかいなと思って、まあちょっとうまいことだまされたんですけど、いっぺんちょっとしてみました。

　でも、手打ちの点字の感覚と、タイプのキーの配分が、どうもうまいこといかないで、原本を左に置いて、それを見ながら、また点字の表も見ながら、指も考えながら、だから、もうほんとに苦労しました。手の指の対応がなかなかいきませんで。

　でも、朝９時から夕方５時まで、お友達にも「電話に出ませんよ」と言って、もう必死に打ちました。そうすると、もう原本見ただけで、ひと月ぐらいで、気にしなくても指が動くようになったんですね。それが後年、とても役に立ったんですね。

　そうですねえ、２年ぐらい前やったかなあ。智がふっと言いました。「お母ちゃん、指点字はね、なんで覚えついたんだい」って言いました。だから、「あなたのおかげよ」と言ったんです。　それはライトブレーラーですけど、点字タイプライターをマスターしてくれといって、指が動くようになったということが、指点字につながったんですね。

　それは不思議なことなんですけど、指点字を発見するまでに、ちょっとひともんちゃくがあります。

　高等部２年生の冬休み、神戸に帰ってきました。そのときはまあちょっと、おみやげを持って帰ってくれたんですね。「お母ちゃん、ちょっと耳が聞こえにくいんだ」というので、驚いて大学病院へ飛んで行きました。すると、もうすでに30デシベルになっていたんですね。30デシベルといいましたら、もう私の素人考えですけれども、30パーセントほど聞こえが悪いんですよね。だから、相当大きな声で言わないとちょっと通じないというか。今、私がちょっと左がだめになって、右がちょっとそれぐらいになっているかもしれませんけど、これは老人性やと思いますけど。

　それで、そのときに私は驚きました。目が見えないうえに、耳までなったらどうするんだと思いました。その病名としては、特別に発する原因がわからない突発性難聴みたいなもので、特発性難聴という名前を付けられました。

　それで一応、ちょっとホルモン系統のお薬が出たんですけど、智はちょっと嫌いなんですよね、そういうホルモン系を飲むのはね。あんまり飲みたくないって言うし、主人は主人で、現代医学を信じろと言うし、もうほんとに、そこのところで大変でした。

　それでも、何とかもらった薬は飲んだんですが、日に日に、日に日に、聴力は落ちていきました。お正月までは１週間ぐらいしかなかったんですけど、紅白を聞いていると、何や歌ってる子が、アイドルは歌が下手やと思うけど、どうもおかしい、いつもと違う。ピアノをぽんと叩いてみても、それがううううっとひずんで聞こえる。「僕の耳はどうなってるんだ」と叫びました。そういうふうに、たった一度叫びました。「この広い世の中で僕の耳を救える医者は１人もいないのか」と言うて叫んだときには、もう昼間は誰もいません、私だけですから。ほんとにどうしようかと思いました。ほんとに、どういうのかなあ、おろおろしました、私。でも、たった一度言っただけで、その後は言いませんでした。

　そのうち、智が聞いてきた漢方方式でちょっとやってみようということで、その漢方の先生の言われるのは、「現代人はカロリーの取り過ぎ。玄米、菜食、１日１食でよろしい。そして10キロ走りなさい」と言うんですよ。そしたら智が、「僕も10キロ走ります」って言うんですよ。そんな、目の見えない人で、おまけに耳も遠いような人はどうして走ったと思いますか。

　そのころは私、まだちょっと50歳前で少し元気で、少し若かったもんで、自転車に乗れたんですよ。ほんで、私の腰にベルトを巻いたのを、智が自転車の右側に立って、左手で私のベルトを持ち、自転車の右側を伴走したんですよ。えっさえっさと走ったんですよ。

　そしたら、神戸は、上り坂・下り坂が多いんです。それで、ものすごく歩きにくいんです、走りにくいんです。それでね、私もちょっと弱虫ですから、すぐに疲れた。「智、もうしんどいわ。ちょっと休もう」と言ったら「だめだ。まだ10キロ走ってない」と言って、「あなた、何言ってんですか。あなた、自転車でしょう。わたし、走っとんでっせ。しんどいのは僕のほうです」と言って一つも言うこと聞いてくれないんです。ほいで、「雪が降ってきたから、寒いからやめよう」と言っても言うこと聞いてくれません。

　あるとき、近所にお父さん方が野球なんかするグラウンドが、市民グラウンドというんですか、あれがあることを見つけまして、そこへ行って走ることにしました。そこは、だいたい１周が300メートルぐらいあるかなと思うんですけど、そこでえっさえっさ走りました。そこは平たんですから、楽なもんやと思って一生懸命走ってました。

　だけども、ほかの人の目から見たら、どういうふうに映ったでしょうかねえ。まあ２～３人は、同じように朝、走ってる人いたんですけど、バックネットのそばに、３人ほどおばあさんが固まってて、こっちをじいっと見て何か言ってるんですよ。だから聞こえるように言ってるのか、聞こえないように言ってるのか知りませんけど、何かね、何とかかんとかって言ってるのよね。えっさえっさと走って、そのおばあさん方の近くに行ったら、「ああまでせんでもええのにねえ」って言ってるの。

　近くに舞子中学校いう中学校があったんです。私は、紺のトレーニングウェア上と下、智も同じように上と下、紺のやつを着とるでしょう。自転車に乗って、イヌの調教みたいに子どもを引っ張って歩いとる。あれは、きっと悪がきを、先生がこらしめとるんやろうと思ったんかもしれませんね。

　「かわいそうに、あの坊ちゃん。ほんまにああまでせんでもええのにねえ」って、聞こえよがしに言ってんの。そんなの、しごかれとんの私のほうですよと、私は内心思いました。そんなことがあったんですが、だから人から見たら、イヌの調教しとるように見えたかもしれませんが、もうそんな、人がどう思うか、そんなことを気にしてる暇ありません。とにかく、少しでも耳がよくなるように運動させて、鍛えてと思って、一生懸命２人がしてますでしょう。

　そして、ある日のことでした。智は、真冬でも汗だくだくなんです。お風呂をわかして行きますから、帰ったらすぐお風呂に飛び込む。そして、さっさっさっと着替えをして、自分の机の所に座って、もう自分のしたいことをしてるんですよね。私は、まだちょっとせんならんことがあるから、台所でちょっと片づけもんなんかしてたんですよ。そうすると、そこへ智がやってきました。そして、「お母ちゃん、もうそろそろ病院行く時間だぞ。あんたは、いつも相変わらずぐずぐずしとるなあ」って、えらそうに言うたんですよ。

　もう毎日、病院へ行ったんです。遠いとこまで。神戸医大まで。まあえらそうに、この子、何言うとんやろと。ほいで、耳の神経は、一度倒れたら二度と復活しないと聞いてたから、点字タイプライターでこちらの言葉を書いて、そして智に渡して、智は口で返事をしてくれるので、それで筆談みたいでしてたんですよね。ところが、智はそんな文句を言うとる。ちょっと待ってよというて、言葉を伝えようと思うんやけど、その点字タイプライターが、そこになかった。

　どうしようかなあと思ったときに、そこにぶすっと立っとる智の手をぎゅうっとこっちに引っ張って、手の甲を上にして出させたんですよ。そして、指の人差指、中指、薬指の左右の指に、私は、ぽんぽんぽん、ぽんぽんぽんと打って、それは点字を打ちますよという意味を込めて、言葉で言う暇がないので、ぽんぽんぽん、ぽんぽんぽんとして、そしてゆっくりと、「さ　と　し　わ　か る　か」と打ったんですよ。そうすると、対面ですから逆さまですのに、智は「わかるで」と言ったんです。

　へえ、指で点字打ったのがわかってくれたと思ったら、私はものすごううれしかったんですよね。

　智はきっとね、怒ると思ったんです。「僕をばかにしとんのか。何や、そのごじゃごじゃして」いうて怒ると思ったんやけど、いやあ指で打った点字が通じたと思ったら、私はものすごくうれしくて、それからは、智はちょっとうるさがったんですけど、もう紙に点字を打たないで、智の指に直接、点字を打つことにしました。

　いちばん最初が対面やったために、病院に通院しとるときにも、道の真ん中でも、対面で智の指に「あんた、きょう、おひるごはんどこでたべる」とか点字で打ったりしました。すると智は「そんな変なことしてくれるな。僕のこの耳に直接話してくれ」と言いました。そのときは、まだちょっとだけ聞こえてたので、嫌だなあと思ったんやと思うんですね。

　話が、もう少し賢い話をしようと思ってたんですけど、そんなことでした。

　それで、ある先生に「指点字という方法で会話してるんですよ」と言うた。その先生、女の先生ですけれど、「あら、それそったくねえ」って言われたんです。口へんに卒業の卒と書いて「啐（そつ）」、それから口へんに豚の肉づきを取ったこういうのを書いて「啄」、「啐啄（そったく）」というのよ。これは、ニワトリのひなが卵からかえるときに、卵の中からこつこつと打って、打つ、それが「そつ」というんです。そしたら、親鳥が外からぽんぽんと殻を叩いて割ってやる。それで生まれるんです。それは禅宗の言葉らしいですけど、「啐啄同時」といって、どんぴしゃというか、二度とない機会というか。だから、向こうが求めてることと、こっちからしたことがぴたっと合ったという、またとないことだということらしいです。

　ほんとうは、お父さんが点字を書けないのに、一生懸命、智のために励ます点字の手紙を書いてくれたんですが、それも読んでみようかなと思ったんですが、もう時間がないみたいですから。

　ちょっと読んでみましょうか。

　智が目も耳もだめになったのに、東京の盲学校の高３に復帰するというたときやったかなあと思うんですけど、玄関で、「それじゃ行ってまいります」って言ったときに、「これ、智に渡してくれ」って言って、何か点字の書いてあるやつを私に渡してくれたんですよ。　だから、あら点字が書いてあるわと思って智に渡したら「何やこの点字、下手くそな点字やなあ。またお母ちゃんが打ったんやろ」と言うから、「あほ、パパが打ってくださったんやで」と伝えました。すると智は、「へえ、お父ちゃんは点字知らなかったはずやのに」って、声に出して読みました。父の点字の手紙。

　「新しい挑戦に向かって、幼いときからの風雪の人生。これはお前にだけ与えられた試練かもしれない。結果を恐れず努めるところに、新たな展望が開けるのだと思う。世の多くの障害者の先駆者となってほしい。かつて、お前を愛してくれた今は亡き人たちと、今生きて、お前を見守ってくださる人たちの愛情に応えるためにも、奮起してくれ。それでは、体に気を付けて元気でな」って。

　もっともっといっぱいあったんですけど、これはＮＨＫが『ＮＨＫスペシャル』に、この点字の手紙を省略して使ったんですね。だから、これちょっと使わせてもらいましたけど。

　要するに、こういうのを一生懸命。もっとおもしろいこのエピソードあるんですけど、もうやめときます。

　それから、もう一つだけ最後に。

　智が、アメリカの同時多発テロがありましたでしょう。飛行機に乗って、どっか外国に行ったら危ないというような時期に、オーストラリアで、「世界ヘレンケラー会議」というのがあったらしくて、大会か会議か。そのときに指点字。

　えっ、何？。

(会場フロアから、福島智氏が発言「ニュージーランドや」)

　ニュージーランド。でも、オーストラリアに関係あるでしょう。

　それで「僕が、その指点字はマイマザーが考え出したものですって言って、それに関する詩を書いたから、ちょっとこんなんだよ」言うて見せてくれたのを最後に読ませていただきます。

　指先の宇宙

　僕が光と音を失ったとき

　そこには言葉がなかった

　そして世界はなかった

　僕は闇と静寂の中でただ１人

　言葉をなくして座っていた

　僕の指に君の指が触れたとき

　そこに言葉が生まれた

　言葉は光を放ち

　メロディーを呼び戻した

　僕が指先を通して君とコミュニケートするとき

　そこに新たな宇宙が生まれ

　僕は再び世界を発見した

　コミュニケーションは僕の命

　僕の命はいつも言葉と共にある

　指先の宇宙って

　紡ぎだされる言葉とともに

　福島智

　という詩を書いたんだよと言って教えてくれました。

　今日、私たちが歩んでこれたのは、そのほか今は亡き小島純郎先生やら塩谷先生のご恩は、とても大きなものでした。それから、今も絶えずそばにいて、智に指点字通訳をしてくださる人があります。その方々の大勢の方。それが、日本中で智を応援してくださってる方がいるんです。その皆様、もう全部含めての受賞やったと思います。ありがとうございます。この場をお借りして、皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。

（終了）